

資料の保存に関する調査研究

—資料の保存に関するデータ処理専門委員会報告—

平成7年5月

国立大学図書館協議会

「資料の保存に関するデータ処理専門委員会」

目 次

「資料の保存に関する調査研究班」最終報告第3章の追加分：

長期保存の対象となる資料の劣化状況調査－未処理データの分析－

1.	未処理データ集計の概要	1
2.	入力状況	1
3.	集計結果の分析	3
1)	保存すべき資料の酸性劣化状況	3
2)	重複所蔵資料の書誌NCID	4
3)	出版年代による劣化状況	4
4)	媒体変換済み劣化資料	6
4.	媒体変換にかかる経費の最終試算	6
1)	計算の根拠	6
2)	ページ数等の集計結果	7
3)	試算結果	9

参考資料

重複入力データNCID	10
-------------	----

長期保存対象となる資料の劣化状況調査

－未処理データの集計・分析－

1. 未処理データ集計の概要

資料の保存に関する調査研究班では、すでに平成5年の中間報告、平成6年の最終報告を行った。一連のデータ集計の概要については、平成6年5月に出された資料の保存に関する調査研究－「資料の保存に関する調査研究班」最終報告－をご参照いただきたい。

なお、同最終報告で述べているように、本協議会加盟館が所蔵している資料のうち、長期保存対象となる資料の劣化状況を把握するために、学術情報センターの目録所在情報データベースに劣化状況に関する情報の入力を依頼し、そのデータ入力の締切り日を、各国立大学の意向を踏まえ平成6年11月末としたため、平成6年5月の同最終報告の集計数値の報告は、平成5年11月末日までに入力されたデータを集計したものとなった。従って、今回の報告は、未処理として残った平成5年12月から平成6年11月末日までの入力データの集計結果である。報告内容については、資料の保存に関するデータ処理専門委員会で検討した結果、表及び図表等は基本的には前回の集計を踏襲したが、若干の見直しを行い、一部簡略化を行った。

データ集計に当たっては、今回もリスト出力等について、今年は特に多忙の折りにも拘わらず、学術情報センターのご理解と多大なご協力をいただいた。ここに深く感謝申し上げます。

2. 入力状況

前回集計結果は表1のとおりである。今回の集計対象となった入力データである平成5年12月から平成6年11月末日までの入力状況を示したものが表2である。前回同様、同一大学内の学部等から入力された数値は一大学分として集計している。入力大学数では、2年間通して入力した大学又は前・後の1年間のみ入力した大学があると思われる。結果として、図書・和雑誌については前回集計時とほぼ同数の大学が入力しているが、洋雑誌については前回集計時の6大学から今回は12大学と倍増している。2年余りの入力期間の内、前回集計結果（図書10, 488冊、雑誌237タイトル）に比べて、今回の1年間の入力件数（図書12, 599冊、雑誌1, 236タイトル）の方が伸びており、特に雑誌の伸びが大きかったことが特徴的である。

2年余りの入力期間の集計総計は表3のとおりである。

表1. 国立大学のデータ入力状況（平成4年10月～平成5年11月末日分）

	和書	洋書	和雑誌	洋雑誌
大学数	27	32	8	6
入力件数	3,663	6,825	210	27

表2. 国立大学のデータ入力状況（平成5年12月～平成6年11月末日分）

	和書	洋書	和雑誌	洋雑誌
大学数	28	32	9	12
入力件数	5,909	6,690	971	265

表3. 国立大学のデータ入力状況（平成4年10月～平成6年11月末日分）

	和書	洋書	和雑誌	洋雑誌
大学数	55	64	17	18
入力件数	9,572	13,515	1,181	292

3. 集計結果の分析

1) 保存すべき資料の酸性劣化状況

未処理データ集計の結果、和書・洋書における劣化状況は表4のとおりである。

なお、雑誌では、前回同様、同一タイトルのなかでも刊行年代によって、劣化度が異なるものがあり、双方とも集計したため、表2の総数とは一致しない。

表4. 劣化度状況（平成5年12月～平成6年11月末日分）

		図 書		雑 誌	
		(冊 数)		(タイトル数)	
和 書	劣化度A	4,785	38%	961	77.1%
	劣化度B	1,124	8.9%	19	1.5%
洋 書	劣化度A	6,140	48.7%	253	20.3%
	劣化度B	550	4.4%	14	1.1%
計		12,599	100%	1,247	100%

前回の集計では、劣化度Bは洋書に多く、雑誌ではその逆になっていたが、今回は、劣化度Bは和書に多く、雑誌では和・洋の大差はない。全体像を見るために、データ入力期間に学術情報センターに入力された図書・雑誌の総計の劣化状況を示したものが表5である。

表5. 劣化度状況（平成4年10月～平成6年11月末日分）

		図 書		雑 誌	
		(冊 数)		(タイトル)	
和 書	劣化度A	8,300	36%	1,166	77.9%
	劣化度B	1,272	5.5%	36	2.4%
	小計	9,572	41.5%	1,202	80.3%
洋 書	劣化度A	11,751	50.9%	279	18.6%
	劣化度B	1,764	7.6%	16	1.1%
	小計	13,515	58.5%	295	19.7%
合 計		23,087	100%	1,497	100%

この総計表では、図書の和・洋の入力比率は、和書は41.5%、洋書は58.5%である。又、和書の劣化度A・Bの比率を計算すると、劣化度Aは86%台、劣化度Bは13%台であり、洋書においても同じ比率である。和・洋ともに劣化資料の13%位は劣化が著しいものと各大学が判断しているという結果がでている。

雑誌では、入力比率は和雑誌の方が圧倒的に高く80.3%である。又、劣化度Bは和雑誌で2.9%、洋雑誌で5.5%となっている。従って、この表の数値からは図書の方が劣化が進行している傾向がでている。

2) 重複所蔵資料の書誌NCID（平成4年10月～平成6年11月末日分）

前回の集計で日本国土内の地理的条件の違いによって、そこにおかれた資料の劣化度の違いについて傾向を見いだすことを想定したが、各大学における所蔵環境の相違等、地理的要素と必ずしも結びつかない諸要素があるため、明確な数値となって表れないことが分かった。従って、今回は参考のために複数の機関で重複入力があったNCIDを参考資料として添付することとした。

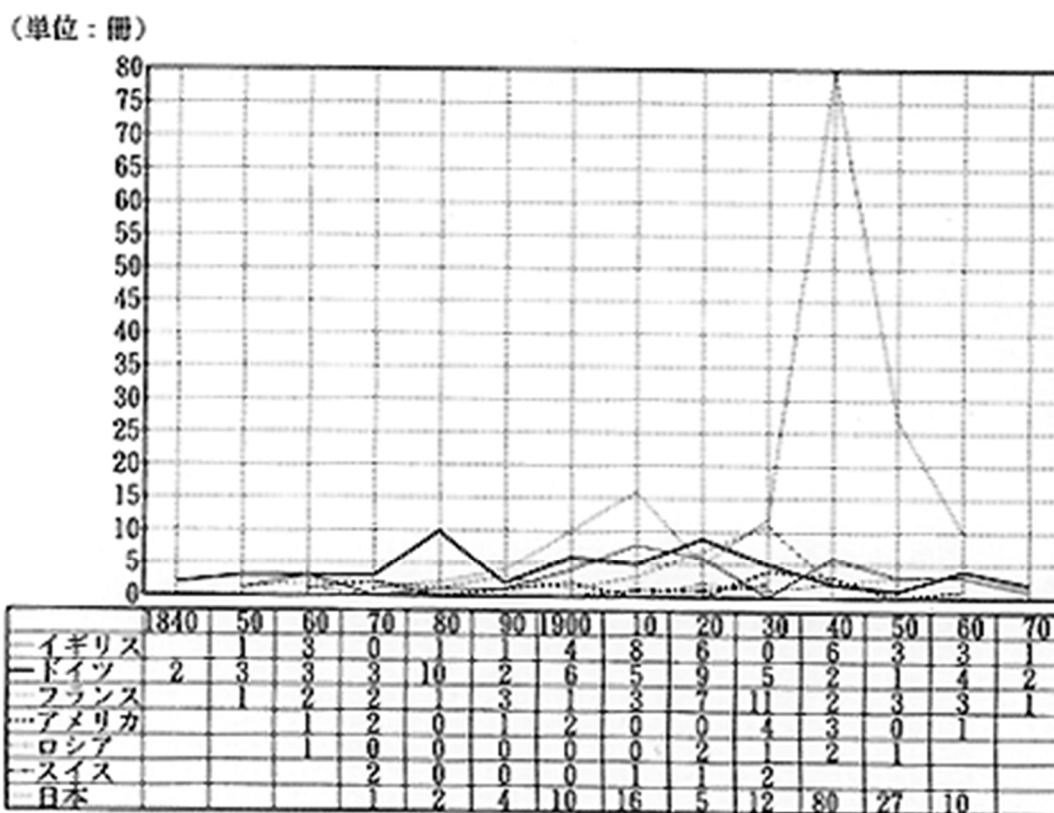
3) 出版年代による劣化状況

前回の集計では、従来から指摘されてきた出版年代による劣化状況の相違を、実際に入力されたデータではどうなっているかを調べた。その結果を図表にしてみると、「調査要領」の目安として示した出版年代とほぼ一致する傾向がみられた。又、図書・雑誌とも同じ傾向にあることも伺えた。

今回の集計結果を図表に示すに当たって、再度、「調査要領」の目安として示した出版年代を示すと、欧米では総括的に1865～1900年としたが、国の事情によって若干異なり、ドイツでは1917～1923、1940～1950、フランスでは1922～1930、1947～1951の各年代に集中しているとした。又、日本では1889～1912、1940～1950年代の劣化が著しいとした。

今回は図書についてのみの出版年代別集計であるが、前回同様、30冊につき1冊の割合で380冊余のデータを抽出した。年代区切りも前回同様、10年区切りとした。

図表1 国・年代別劣化状況（図書：平成5年12月～平成6年11月末日分）



この図表から、前回同様、今回の集計結果もイギリス、ドイツ、フランス、日本等においては指摘されてきた出版年とほぼ一致する。ただ、ドイツについては、今回の集計では1880年代に出版された資料も劣化している状況が伺える。又、日本では、1930年代から1960年代で全体の77%を占めている。日本では、前回のこの年代が72%であったことから、劣化資料の調査入力期間の2年間に学術情報センターに入力されたデータ全体の75%位は1930年代から1960年代に集中しているということが推測される。この図表に表示できなかった1840年以前及びその他の出版国では次のようになっている。

イギリスで1700、1750、1790、1810年代に各1冊、ドイツで1720、1770、1800、1820年代に各1冊、フランスで1790年代に2冊、オランダで1740、1890年代に各1冊、1930から1960年代に4冊、中国で1920年代に3冊、1930年代に1冊、韓国で1930年代に1冊、イタリアで1820から1950年代に16冊、その内1890年代に5冊、オーストリアで1870、1950年代に各1冊、チェコスロバキアで1900から1940年代に6冊、その内1930年代に3冊、スペインで1910年代に1冊、インドで1880年代に1冊、アイルランドで1940年代に1冊、ポーランドで1840年代に1冊が劣化資料として入力されている。

2年余りの入力期間の抽出データ総計を国・年代別劣化状況として表したのが図表2である。この図表によるとドイツ、フランス、日本の劣化状況の特徴が、より明確に表れて

いる。

図表2 国・年代別劣化状況（図書：平成4年10月～平成6年11月末日分）

4) 媒体変換済み劣化資料

今回の調査において、既に媒体変換されている資料はなかった。

4. 媒体変換にかかる経費の最終試算

媒体変換にかかる経費の最終試算に当たっては、「資料の保存に関する調査研究班最終報告」で述べているものと同じく、マイクロフィルムに媒体変換するものとして計算した。

従って、計算の根拠となる資料の劣化状態に係る要件、資料の形態に係る要件及びマイクロフィルムの仕様については前回と同じとした。要点のみを記述すると次のとおりである。

1) 計算の根拠

ア. 資料の劣化状態に係る要件

劣化状態（A：劣化が進行中、B：劣化が著しいの2つの区分）によりマイクロフィルム撮影作業における手数が異なる。

